百々裏話(59)

おもて　あきら

【良基消息詞について】

福田秀一氏が『芸能史研究』10号(40年7月)の「世阿弥と良基」なる論考に紹介された、彰考館文庫蔵「山のかすみ他」に合写の「自二条殿被遣尊勝院御消息詞」(以下、良基消息詞と略称)は、世阿弥研究に大きなプラスをもたらす貴重な資材であった。即ち同書は、関白・摂政を歴任した北朝の代表的公家で、連歌界の第一人者でもあった二条良基から、「尊勝院」へあてた書状の写しであり、その内容は、一度逢った藤若(世阿弥の幼名)の美少年ぶりと諸芸に堪能なことを讃美し、ぜひもう一度逢いたいから連れてきてほしいと依頼したもので、別に、大和猿楽観世大夫の子の鬼夜叉が良基の許へ参上した際に藤若の名を与えられた意の後人の注記がある。

この良基消息詞が初めて紹介された時、私は、福田氏が論証された如く文辞は確かに良基的であるとは思いながらも、内容について幾つかの疑念を抱き、すぐには信じることができなかった。具体的に言えば、

(1)書状にしてはあまりにも長大である。

(2)もし良基の書状で藤若が少年時代の世阿弥ならば、福田氏の推定通り永和年間(一三七五~九)の作であろうが、当時60歳に近かった良基がこんな情熱的な恋文まがいの文章を書いただろうか。

(3)良基の同僚の三条公忠の日記『後愚昧記』の永和四年の記事に、足利義満が祇園会鉾見物の桟敷に「大和猿楽児童」を召して盃を与えたことを非難し、猿楽を「乞食所行也」と蔑視しているのは著名な事実で、それが当時の公家の猿楽に対する一般的評価であると見られていたのに、前関白ともあろう人物が猿楽の児をベタボメに賞讃することが、はたしてあり得たろうか。

(4)藤若が「鞠連歌などさえ堪能」だったと文中に言うが、猿楽の児にそうした教養を身につける機会があっただろうか。また、連歌はともかく、鞠はまさしく世阿弥のいう非道のはずで、『花伝』序に「非道を行ずべからず」と教えているのとそぐわない。

(5)藤若は初名鬼夜叉だったと注記に言うが、『申楽談儀』に見える花夜叉・藤夜叉・亀夜叉・松夜叉などはみな田楽の役者であり、猿楽に「夜叉」の名を用いた例が見られない。

(6)注記に藤若の名は良基命名というが、春日権神主師盛が永徳元年(一三八一)に山城の寺田の長者の次男に付けた名が藤若丸であり(続群書類従『至徳二年記』三月)、『犬筑波集』恋の部に「藤若殿と名を申すなり　みめもよく形もよきがはな(鼻・花)垂れて」とあるなど、藤若は児の名としてありふれたもので、良基の命名を待つまでもなく用いた名である可能性が強い。

などの諸点から、良基消息詞が良基の著述らしいことは認めつつも、文中の藤若が世阿弥であるかどうかを疑っていたのである。そして、能や舞のことは文中に見えるが猿楽の語を用いていないこと、義満が良基をも伴なった至徳二年(一三八五)の南都下向の際に、興福寺の延年を激賞し、康応元年(一三八九)にはわざわざ奈良から延年の児を呼び寄せていること(『至徳二年記』等)などから、南都の延年の児に藤若を名のる者がいたのではないか(寺院の児には上流階層の子弟が多く、少なくとも前掲の疑問の(3)は氷解する)と推測し、その方面の資料を探索してみたりもしたのである。

然るに、伊地知鉄男氏が『国文学研究』35

集(42年3月)に紹介・翻印された、崇光上皇宸記と見られる『不知記』によって、猿楽観世の子の藤若が十三歳の時に二条良基と対面し、その後も連歌の指導を受けていたことが明らかとなった結果、良基消息詞の藤若が少年時代の世阿弥であることも確実となり、注記をも含めて、同書の信憑性は疑問のないものと認めざるを得なくなったのである。私が抱いた多くの疑問は、従来の常識に捉われた杞憂、ないし考え過ぎであったようである。

良基消息詞によって世阿弥の伝記に新たに加え得るのは、はじめ鬼夜叉と称していたこと、足利義満の藤若賞翫(『申楽談儀』によれば十二の年から)直後の頃に良基と世阿弥に交渉が生じ、藤若の名を与えられたこと、その仲介者が尊勝院で、藤若と尊勝院にもつながりがあったこと、藤若が美貌でかつ芸に秀でていたこと、鞠や連歌にも堪能であったこと、などであるが、それらが世阿弥研究に及ぼす影響はかなり大きい。たとえば、藤若が鞠に堪能であったという点は、『花伝』序の「非道を行ずべからず」が単なる道学者流の教訓ではなく、自己の若い体験に基づく訓戒であったことを推測させるし、若年から連歌を嗜んだ事実は、世阿弥作の謡曲について考察する際に常に念頭に置くべきであろう。猿楽を乞食視した『後愚昧記』の記事が、必ずしも当時の公家の猿楽に対する一般的態度を示すものではないことが明らかになる点も、重要なことである。そうした貴重な資料を提示された福田氏の業績を高く評価したい。

ところで、良基消息詞について私が感じた疑問のうちの(1)や(2)は、良基著述が確実であっても依然として残る疑問であり、それは、同書の根本的な性格に関連すると思われる。

良基消息詞は、その長大さと言い、飾りに飾った文辞といい、通常の実用のための書状とは異質のものである。同書を、彰考館文庫本が、同じく良基著述の『榊葉日記』(貞治五年の神木帰座の記)や『小島口号』(おこしまのくちずさみ)(文和二年美濃行幸の紀行)、飛鳥井雅康の『山の霞』(文明二年後花園院崩御記)、一条兼良の『雲井の春』(享徳二年晴の御鞠記)などの美文の類と合写しているのは、良基消息詞が規範とするに足る文章として評価されていたことを推測せしめるが、その事が良基消息詞の重要な一面を暗示しているように思われる。つまり良基は、宛名の尊勝院以外の人にも読んでもらうことを最初から意識し、言葉を飾った藤若賛を、書状の形式を借りて綴ったらしく思われるのである。そして良基が読んでほしかったのは、ほかならぬ足利義満ではなかったろうか。藤若の舞を玄宗の霓裳羽衣の曲や光源氏の青海波の舞にたとえて讃美した後に、

将軍さま賞翫せられ候も、ことはりとこそおぼえ候へ。得がたきは時なりとて、かやうの物の上手も、おりを得候こと、かたき事にて候に、あひにあひて候事、ふしぎにおぼえて候。天馬も伯楽にあはざれば、あしならぶなし。卞和玉三代をへてこそ、宝にもなりて候し。しる人のなき時は、正躰なき事にて候。かかる時にあひ候しも、ただものならずおぼえ候。

と、表面は藤若の幸運に言及する形で、彼を見出だした義満の目の高さを暗にほめそやす文句を連ねていることが、それを推測せしめる。尊勝院に藤若同伴を依頼するだけの書状や、藤若を讃美することのみを目的とした書状であれば、右の文章は不必要であろう。尊勝院を通してこの書状が義満の目にふれることをあらかじめ期待して書いているのではなかろうか。『後愚昧記』は、義満の機嫌を取ろうとする諸大名が藤若に競って物を与えた由を伝えているが、良基が同様の手段によって将軍義満の意を迎えようとすることは、十分考えられるであろう。老齢の良基が身に似合わぬ情熱的な言葉を連ねて長文をしたためたのは、義満が寵愛する藤若を誉め讃えることによって、義満の好感を得ようとする目

的があったからと解して、恐らく間違いあるまい。藤若を引見した最初の目的がすでにそうだったのであろう。そうした見地からは、良基消息詞に於ける藤若に対する賞讃の言葉を客観的評価として受け取るのはかなり危険であり、同書を資料として利用する際には、相当の配慮が必要であると思われる。

一体、良基は足利義満の公家生活の指南役的位置にあったのであるが、義満と良基が急速に接近するのは、義満が従三位に叙せられて公卿の列に連なった永和元年十一月以後であり、しばしば繰返された義満の二条良基邸訪問の最初は永和四年十月である。良基が初めて藤若を引見し、良基消息詞を書いたのはこの間のことである。良基の藤若賞翫が義満と良基を親密にした一つの原因になっていることも、考えられないことではあるまい。

なお、良基消息詞の宛名の「尊勝院」については、次回に考察したい。（43・9・6）

●●●●●

能の生命力

野村四郎

室町時代より継承されて、今日に生きている能の生命力の根源はどこにあるのでしょうか。継承されてきたということは、少なくとも能の生命というものが、絶えず創造されていたということです。いいかえれば、継承とは、発展と同一義といってもよいのかと思います。

伝統を受け継ぐ者の責務を、私はこの中に感じさせられます。私達の先達は折に触れ、修業とは肉体的労苦の集積の中にある、というふうに申しますが、それは芸術的生命の創造が、心、技、理論と体験などのそれぞれを総合し、超越した全一的エネルギーで行われねばならぬという意味と思います。一般的には非合理とも思われるこの言葉も、形あるものの確かな手触りといったように納得させられるのです。

× × × ×

《繭の会》発足

浅見真広・北浪照雄・山本順之・若松宏充の四人が、この秋より〈繭の会〉を作り、一期四回を単位として公演することになりました。

（前略）……今よりもっと芸を磨きたいし、今以上に観客と交流もしたい。新しい観客を開拓したい。更にはこの道のあるべき姿を追求したい。それにはわれわれの会が欲しい。

（中略）……現在の能界は前述したような盛況を呈してはいるものの、一方では芸道修業のあり方、後継者の養成、興業形態のあり方など、検討すべき多くの問題をかかえていると思います。そうした事は、人まかせにしておくべきでなく、自分達がやらなければならないことだと思います。無責任な批判を繰返すだけでは進歩はないでしょう。旧習を批判するだけでなく、新しい能のあり方を会の仕事を通してさぐってみたい……（後略）

〈発足の栞より〉

大きな目的の中の一点から動き出そうとしている〈繭の会〉に、銕仙会同様、お力添えをお願いいたします。

〈繭の会〉第一期定期公演　プログラム

会場・観世会館

第一回10月28日　井筒（順之）安達原（宏充）
第二回11月25日　頼政（宏充）殺生石（照雄）
第三回1月22日（44年）　東北（真広）善界（宏充）
第四回3月31日　巴（照雄）須磨源氏（順之）

入場券　八〇〇円
学生　四〇〇円
四回通　二、〇〇〇円
学生　一、〇〇〇円

事務所　渋谷区代々木四ノ三六浅見方
切符申込みは銕仙会でも受付けます。